

資料紹介―青山学院大学図書館蔵『恵比寿大黒絵巻』

塩川和広

ここに翻刻紹介する青山学院大学図書館蔵『恵比寿大黒絵巻』は、『大黒舞』の伝本である。『大黒舞』は近世初期頃に成立したとみられるお伽草子の一本で、大黒天・恵比寿への信仰を背景として、正月の門付け芸である大黒舞やえびす舞を取り込んで作られた。伝本は現状確認できるだけで一一本を数える。諸本豪華な装丁で、さらに端本などを含めると膨大な数に上ることから、当時、富裕層を中心に広く享受されていたことがうかがえる。本稿で紹介する青山学院大学図書館蔵本も同様である。本稿では青山学院大学図書館蔵本の翻刻紹介と、伝本の位置づけを考察することを目的とするが、近年発見された伝本も少なからずあり、全容の把握も試みたい。

1 作品概要と伝本について

『大黒舞』には二系統の伝本が知られており、本稿では致富に至る人物の名で「大悦の助」系、「磯の太夫」系と呼称する。まず青山学院大学図書館蔵本に依って「大悦の助」系の梗概を記す。

吉野の里の大悦の助は、親を望みのままに養わんことを願い、清水

寺に参詣する。夢枕に立った清水観音は、大悦の親孝行を理由に、万の神が大悦を守護していること、また観音自身も福德を授けることを告げる。清水観音による福德授与はすぐに成就し、一筋の藁しべを交換し続けた結果、大悦は黄金三枚を手に入れる。さらに年が明けると、大悦のもとを大黒天が訪れ、節分にやってきた鬼を払う方法を教える。続いて恵比寿が現れ、福神たちは酒宴を開き、舞う。(以上上巻)

福神たちは俳諧連歌、相撲などを楽しみ、大悦を守護した結果、大悦は富貴栄華の身となる。それを聞き及んだ大江山の盗人が来襲するが、大黒天と恵比寿により退けられ、さらに宝への執着から盗人が変じた修羅も、大黒天の言葉に従って大般若を講読した功德により昇天させられる。その噂は帝の耳にも入り、大悦は昇殿を許され、領地をもらい、壬生中納言の娘を妻に迎え、一族はますます繁昌する。大悦の助は大黒天と恵比寿を歓待し、大黒は舞を舞って祝福する。福神の加護の元、大悦の子孫は並ぶ者がないまでに繁昌した。やがて並ぶ者がないほどにまで子孫繁昌する。(以上下巻)

序盤の孝子説話、藁しべ長者譚、中盤の福神の酒宴、芸能、節分起源譚、終盤の盗賊・修羅の来襲と撃退、天皇による褒賞というモチ

フから成り、福神の酒宴と芸能、盗賊の来襲と撃退、貴人からの褒賞は、影響関係が指摘されている『梅津長者物語』にも引き継がれている。

対して「磯の太夫」系は「大悦の助」系と内容は多く重なるが、百鬼夜行の来襲に対し龍宮の眷属を招来し、また人名や地名に瀬戸内の地名が多く登場するなど、西宮の恵比寿信仰を取り込んだ、在地性の強いものとなっている。これは『梅津長者物語』に対する影響を考えるうえで重要なものである。

続いて、伝本の一覧を示す。³⁾

A：「大悦の助」系

- ①蓬左文庫蔵：奈良絵本二冊。『室町時代物語集』五に翻刻。落丁あり。光雲院蔵書。一八世紀初め頃か。
- ②天理図書館蔵：奈良絵本二冊。『山辺道』一八に翻刻。近世初期か。
- ③国会図書館蔵：絵巻二軸。赤城文庫旧蔵。『室町時代物語大成』八に翻刻。近世中期か。
- ④国文学研究資料館蔵：絵巻二軸。新日本古典文学大系『室町物語集』に翻刻。近世前期か。
- ⑤英勝寺蔵：絵巻二軸。『鎌倉英勝寺蔵 大黒舞絵巻』に翻刻。錯簡あり。寛文頃か。
- ⑥青山学院大学図書館蔵：絵巻二軸。近世中期頃か。

⑦島根県教育委員会蔵：絵巻。員数不明。未紹介。『古代出雲歴史博物館展示ガイド』に一部画像あり。明治頃か。

⑧所在未詳『大えつすけ』：絵巻二軸。『山辺道』一八に解題。

天理図書館本の翻刻と校合の形で翻刻あり。寛文頃か。

⑨盛岡市郷土資料館蔵：絵巻二軸。『盛岡短期大学研究報告』二〇に翻刻。近世中期頃か。

B：「磯の太夫」系

⑩個人蔵（愛媛県）：絵巻一軸。『愛媛国文研究』三六に翻刻。脱落・錯簡あり。

⑪個人蔵：絵巻二軸。未紹介。徳川美術館図録『絵で楽しむ日本むかし話 お伽草子と絵本の世界』に一部画像あり。一七世紀か。『室町物語集 下』解題に指摘のある藤井隆氏蔵『ゑびす大黒』か。

II 伝本関係の整理

i 「大悦の助」系①～⑧について

「大悦の助」系については、唯一、⑨盛岡市郷土資料館蔵本が、他伝本とやや距離があるものの、未翻刻の⑦を除く①～⑥、⑧については本文の異同はほとんどない。しかし、その表現からおおまかな関係

性を見出すことはできる。以下は、⑥青山学院大学図書館蔵本を中心に本文を比較したものである。なお、後に掲載する翻刻の資料1～6の該当箇所には、傍線1～6を引いた。

【資料1】 物語冒頭

初めより終はりまで、何の物憂きこと(も)なく、(①②③⑥⑧)
初めより後まで、何の物憂きことなく、(④⑤)

【資料2】 藁しへの交換場面

このしへは、観音の賜ると言へども、宿所へ帰りても、これ何の用にも立つべしとも思はず。(②④⑤⑥)
このしへは、観音の賜ると言へども、宿所へ持ちて帰りても、これ何の用にも立つべしとも思はず。(①⑧)
このしへは、観音の賜ると言へども、宿所へ取り持ちて帰りても、これ何の用にも立つべしとも思はず。(③)

【資料3】 交換の結果得た馬を市で売る場面

やがて馬市に立つて売りたりしに、黄金三枚に代なしけり(⑥)
やがて馬市に立つて売りたりしに、黄金三枚に取り替へぬ(①③⑤⑧)
やがて馬市に立つて売りたりしに、黄金百枚に取り替へぬ(②)
やがて馬市に立つて売りたりしに、黄金三枚に売り代替へぬ(④)

【資料4】 恵比寿の来訪場面における眷属の姿

異形異類の者、万の貝の殻を具足の様にして、(①③④⑤⑥⑧)
異形異類の者、万の貝、牡蠣の殻などを具足の様にして、(②)

【資料5】 盗賊撃退の場面における大黒天の武装

鼠の上にこれを鞍と定めて駆け出で給ふ時には俵を敷き(①②④⑥)
鼠の上に俵を敷き、これを鞍と定めて駆け出で給ふ時には(③⑤⑧)

【資料6】 話末における大黒天の舞

鳴るは滝の水、日は照るとも、よも絶えじ。絶へぬ流れの菊の水、命は千歳を重ねべし。天つ下根も治まりて、げにめでたさぞ限りなき。枝を鳴らさぬ御代なり。神と君との道すべに、城楽に君が代は御さながら悪魔を払ひ、治まる手には寿福を抱き、千秋楽は民を撫で、万歳楽には命を延ぶ。相生の松風、颯々の声ぞ楽しむ、楽しむ。げにや、仰ぎても、ことも愚かや、かかる世に住める民とて豊かなる、君の恵みはありがたや

(①但し「げにや、仰ぎても、ことも」まで落丁、②④⑤⑥)
鳴るは滝の水、日は照るとも、よも絶えじ。絶へぬ流れの菊の水、命は千歳を重ねべし。天つ下根も治まりて、げにめでたさぞ限り

なき。(3)(8)

以上、本文から考えると、馬の売り代を黄金百枚とし、また恵比寿の眷属の兵具に牡蠣という具体名を入れるなど、②天理図書館蔵本はやや表現に独自性があると言える。また③国会図書館蔵本と⑧所蔵不明本、④国文学研究資料館蔵本と⑤英勝寺蔵本が、それぞれ比較的近い関係にあると考えられる。⑥青山学院大学図書館蔵本は⑤英勝寺蔵本とはやや距離があるが、④国文学研究資料館蔵本と近い。これは後に確認する挿絵についても同様のことが言える。

ii 「大悦の助」系⑨盛岡市郷土資料館蔵本の位置づけ

続いて⑨盛岡市郷土資料館蔵本は、先に述べたように「大悦の助」系統の①～⑧と比べて語彙の異同が多い。清水観音の夢告による藁しへの交換の結果得た黄金が十両とされ、大黒舞や俳諧連歌の内容、大江山の盗賊の名なども①～⑧と異なる。次に挙げるのは福神と大悦が俳諧連歌を行う場面である。なお⑥青山学院大学図書館蔵本の本文該当箇所には、後の翻刻に二重傍線を引いた。

【資料7】 福神と大悦の俳諧連歌 (9)

まづ、今日の客人なればとて、恵比寿殿、御発句とぞ聞こえける。
あやかれや齢はいつも若恵比寿 夷三郎

おほちもうばも祝ふ懸鯛 大悦
日の影を恵方にはやく向かひ居て 大黒

資料7の俳諧連歌は、①～⑧では恵比寿の「魚」、大黒天の「稻」と、それぞれの福神に対応するものが詠み込まれているのに対して、⑨では大黒天と関わる語は詠まれていない。さらに冒頭と話末の記述が簡素で、大悦の孝行や大黒天の舞の記述を欠き、孝行(善行)の結果としての福神による致富という『大黒舞』と『梅津長者物語』に共通する構造が崩れていることが指摘できる。

iii 「磯の太夫」系⑩⑪について

第三に、別系統となる⑩⑪の梗概を記すと、広島磯の太夫と妻が恵比寿・大黒天を描いた御札を貰い受け、信心を深めることで富み栄える。ある年の瀬に二人の客人が訪れ、百鬼夜行の来襲を、魚介類とうんかつら大将を呼んで撃退する。正月の宴を開き、客人の一人が大黒舞を舞う。その後、盗賊の一党に襲われるも、客人が小槌と釣り竿をもって追い払い、客人は恵比寿・大黒天の姿を顕す。太夫は両神を祀ると大黒の眷属が鼠となつて家内を守護し、さらなる富貴栄華へと導かれる。

内容的には①～⑨と重なる点が多いが、孝行ではなく信心により致富に至る点、人名や地名に瀬戸内の地名が多く登場し、さらに、

太夫はすなはち、この御神の尊形を作りしりて、御厨子に安置し奉り、香華灯明を供へ、毎日の供物、日頃に超過して、恭敬礼拝を為し奉る。かの六万八千の眷属の福德神は、鼠となりて家内を守護し侍りしかば、それより太夫は、日々いや増しに富み榮へ、四方に十万の蔵を建て、楽しみ誇りけり。(本文欠)を信仰すること、天下に流布し侍るとかや。

と、話末で大黒天の利益が強調される点など、構造に変化が見られる。①⑨が西宮の恵比寿信仰を取り込んだものとみられ、内容としては影響関係が指摘されている『梅津長者物語』と『大黒舞』との中間に位置するものと考えられる。しかし別稿³で指摘したとおり、『梅津長者物語』と関わりの深い『大黒舞』のモチーフは、「大悦の助」系①⑧に見られるもので、「磯の太夫」系とは距離がある。さらなる検討が必要だが、「磯の太夫」系の伝本は、単に『大黒舞』から『梅津長者物語』への途上に位置づけられるのではなく、『梅津長者物語』とは別に恵比寿信仰を背景として生み出されたものとして、福神を扱った作品の多様性を示しているのではないだろうか。

以上、『大黒舞』の伝本を概観してきた。先にも述べたとおり、ここに紹介する青山学院大学図書館蔵本は「大悦の助」系に属し、特に関係の深い伝本として④国文学研究資料館蔵本が挙げられる。次頁か

ら翻刻と併せて挿絵全図を挙げ、簡単に③④⑤と比較を行う。

注

- (1) 第十三回青山日文院生研究会における口頭発表時に、古書肆の大谷大氏よりご教示いただいた。
- (2) 真下美弥子「福神来訪の物語の方法―お伽草子『大黒舞』『梅津長者物語』を中心に」(『立命館文学』五五二、一九九八年一月)
- (3) 松本隆信『室町時代物語現存本簡明目録』(井上書房、一九六二年)に「瀬沼寿雄氏蔵絵入本」(横型本大二冊)が挙がるが、確認がとれないため一覧から省いた。⑧についても所在の確認が取れないが、翻刻が存在するため一覧に加えた。
- (4) 拙稿「お伽草子「福神物」に見る貧福の構造―『梅津長者物語』の貧乏神を中心に」(『立教大学日本文学』一一一、二〇一三年一月)

※本稿は二〇一三年七月、第十三回青山日文院生研究会における口頭発表に基づくものです。席上ご教示を賜りました諸先生方、また翻刻と写真の掲載をご許可頂きました青山学院大学図書館に厚く御礼申し上げます。

(しおかわかずひろ 本学大学院博士後期課程在学)

《書誌》

【形態】 絵巻二軸

【箱書】 蓋表 墨書「恵比寿大黒絵巻 上下／鷹司忠道卿

筆／岩佐派五世筆」

蓋裏 墨書「丁卯初春 古昔斎鑑 珍藏」

【外題・内題】 なし

【奥書】 なし

【表書】 薄鼠色地に、金糸で松葉と、宝珠形に意匠化され

た「寿」文字

【料紙】 鳥の子紙

【寸法】 上 縦 28.8×横 71.60cm (うち表紙 21cm)

下 縦 28.5×横 60.6cm (うち表紙 21cm)

【絵】 濃彩・上巻六図、下巻五図、計十一図

【備考】 鷹司忠道、岩佐派五世、古昔斎については未詳。

岩佐派は岩佐又兵衛の死後、福井で江戸時代中期ころまで存続したとされる。五世の作とすると近世中期頃の写か。

本文は幅 19.0～19.4cm、挿絵は幅 23.4～24.3cmでほぼ同寸。本来は冊子体のを絵巻になおしたと見られる。

《翻刻》

— 凡例 —

一、詞書の改行、文字配列は原本通りに行った。

二、料紙が変わる際には「を、巻の終わりには」を記した。

三、漢字は通行の字体に改めた。

四、「ハ」「ミ」などの片仮名は平仮名に改めた。

五、底本の誤字・脱字と思われる箇所もそのまま翻刻し、校訂は行わ

なかった。

六、挿絵が入る位置にはその旨を記した。

「はじめよりおはりまでなごのものうきこと」

もなく行すゑひさしくさかへ子孫はん

しやうしたる事はよし野の里の大えつ

すけといふものなりこれひとへにおやかう

くゆへとそきこえしそのゆへはかれか

おやかうくをいたせることはもろこしのかん

のふんていよりもおとらすとかやされはかん

の文帝はかんの高祖の御子なりいとけ

なき御名をはかうとそ申侍りきいとけ

なきよりおやにかうくの君にてよろつ

」

しよくしをまいらせられける時もまつみつ
からきこしめしこゝろみ給へり御おとうとの
太子もあまたまし／＼けれとも此みかとは
とにしんきをおこなひかう／＼なるはな
かりけりこのゆへにちんへいしうほつな
むと申ける臣下かたちわうになしまいら
せたりそれよりかんの文帝と申侍りき
しかるにかう／＼のみちはかみ一人より下
万みんまであるへき事なりとしるといへ共
身ををこなひ心にかなふことは成かたきを
かたしけなくも四百余州の御あるしの身とし
てかくのときの御事わさはたつとかりし
御こゝろさしなりかるかゆへに代もゆたかに
たみのかまともにきはひけるとなり又
太しゆんと申せし人もいたつてかう／＼の
人なりちゝはかたくなにしてはゝは又かた
ましき人なりおとうとはあまたおはしけれ
とも大しゆんはすくれてかう／＼をいた
せんあるときれき山といふ所にこうさく
しけるにそのかう／＼をかんしては大さう
きたりて田をたかへし鳥とひきたりて
田の草をくさきりこうさくのたすけをな

「

「

したる也扱その時のてんかの御あるしを
堯王となつて奉るひめ君ましますあねを
はかくはうと申しいもいとをちよえいと申侍
きけうわうすなはち大舜のかう／＼なる
事をきこしめしをよはれ御むすめふたり
を后にそなへつゐに天下をゆつり給へり
是ひとへにかう／＼の深きゆへ也かれこれ
ためしなきにはあらねともことに此大悦
のすけかう／＼その心のをこたりなきも
の也しかるに家はまつしくして親は七旬に
あまりきやうふもかなひかたし是をやしな
はんとて毎日山にいり木をこりてしろな
しちゝはゝをはこくみけるに雨ふれば大
悦かぬれんことを親はかなしみみのかさを
もちてむかひに出けり
(第一図)
此事大悦かへつておやのいたはりをかなし
み今よりのちは持ち来り給ふなとせいすれ
とも風ふけは山の中さそ有らんときる
ものをもちてゆき大えつにきせける
大えつはわか身のことはおもはずおやの
さむからんことをかなしみ何ともしてわれも

「

「

木をこりに山へゆかすちゝはゝもわれ一
しよにありてはこくまんことをおもひめ

くらすといへとも大かたすへきやうもなし有

ときよみつに参りてあふきねかはくは

父母をわかおもひのまゝにやしなはしめ

給へとかんたんをくたぎのりけるに夢

ともなくうつゝともなくくはんをんはしひに

むにくのころをもめしはとのつえにすかり老

僧のかたちをけんし大えつにむかはせ給ひ

の給ふやうなんちはおやかうゝのもの也その

ゆへによるつの神たちはふくしゆ長命とま

もらせ給ふ也われもなんちにふくをあたへんを

のれかへらんとき一のきさはしにわらしへ有

へしそれをとりなはふく人なるへしとの給ふ

てかきけすやうにうせ給ふ大悦のすけふし

きに思ひなから下かうするにまことに

御つけにたかはすわらしへ一すち有とらん

とするところにいつくともなくたけ一ちやう

はかりなるきしんのきたりてあらゝかなる

こゑにてそのしへはわれかのなれはとるへ

からすといふ大えつのすけあまりおそろし

さになむくはんせおんほさつといへはきしん

はそのまゝうせにけり大えつのすけうれ
しきことに思ひかのしへをとりきよみつの

かたをふしおかみ下かうするつゐてに宮

こけんふつせんとみちゝ思ひけるは扱も

くはんおんは何とおほしめすにかこのわら

しへ一すちにてわれをふく人になすへし

と思ひ給ふやらんとふしきならひねくりて

こやすのちさうへまいりぬまことやこれそ

永万元年よりしゆしやうさいとのために

しんりんにましはりやくをしゆしやう

になし給ふなる事のありかたさよと手を

をしもみて出けるにみきのかたをみれば

ありのみうりのありけるかはなちなかれて

とめかねたりしを大えつのすけ思ひける

はここのしへはくはんおんの給はるといへともし

ゆく所へかへりても是なにのやうにもたつ

へしともおほえすまつこれなるおとこの

こゆひをゆひはなちをとめてとらせん

と思ひてそはに立よりこゆひをかの

しへにてゆひければはなちはそのまゝと

まりけるありのみうりなのめならずよろ

こひありのみ三つとり出し是はたうさの

ありのみなりかさねてきたり給へもの参ら
せんやとはそこ／＼よとをしへてとをりけり
大えつのすけはかのありのみをうけとり
思ひけるはさてもふしきなることかなわらし
へのありのみ三つになりたる事よとて

手玉につきけり三年坂をすくるにたいり

上らうとみえて見もならはぬこしにのりたる
かこしをはずへをきおとこをんなはしりめ
くりまとひありくほとに何事にかあらんと
立よりきけは今こしにめしたる上らうの水
めしけれ共なくして御心たえいらせ給ふほと
に水をもとむる也といふに大悦の助たもと
よりかのありのみをとり出し水のながらん程
は是をきこしめし給ひなんやといへはそは
なる女よきことに思ひありのみを参らせける
に御心ちすゝやかになればこしのうちなる上
らうもそこらのおとこをんなまでよるこひ
てよくありのみまいらせたりとてきぬ引
とらせられたり

(第二回)

大えつのすけこのきぬをとりありめて
たやわらしへのきぬになりたる事

よとうちかたかたけゆくに三てうのはし
のつめにてよしありけなるさふらひの
人あまためしくして大はんつとめてか
へり給ふか何とかしたりけん引かへの馬

たふれふしぬやかて馬のり一人をり
きたりてこしよりはりをとりいたしせん
たんのはりたまきのはりなといふを
いろ／＼にさしけれとも立あかるへしとも

みえずとてあやしけなるおとこ一人つけ
をきその外はとをりぬ大えつのすけ
いそぎ立より馬につきてありけるおと

この袖を引馬はともように立まじき
そわれに給はり候へとてかのきぬを一ひ
きとらせければ此おとこはさなく共すて
をきなんものをきぬをえさすればう

れしきことにおもひこそ／＼としてかへりぬ
大えつのすけはこの馬をいろ／＼かんひや
うするにほとなくよくなり立あかり二
つ三つ身ふるひしていなゝきたりその
たけ七寸にあまのおかみのしんしやうさ
たとへはむかしよりつたへきくより聞も
のいけつきするすみといふともかくそ

侍らしとおほえける大えつのすけあま
りのうれしさにゆひをおりてきてもふ
しきのくはんおんの御りしやうかなわら
しへ一すちのありのみ三つになりありの
みのきぬとなりきぬの馬となりたる
事よと思ひ、やかて馬市に立てうり

たりしにわうこん三まいにしろなしけり
うれしきことにおもひいそきわかしく所
にかへり父母にむかつてしかくのよしをか
たりてそのかねにて家つくりしていまは
おもひのまゝにおやをやしなひかうく
をいたしけるほどにそのとしもくれあら玉の
春にもなれはまたさうてうのことなるに
つま戸をほとくとをつるゝものありたれ
にか侍らんと大えつのすけ戸をひらき
てみればいかにもせいひきくかほはある
そめなんとのことくなるかつきんうちきてふ
くろをかたにかけ手には大きなつちを
もちふとくこへたるおとこのあとにはねすみ
のやうなるあやしきかたちなるものいろく
のひやう具をもち十二人うつくまりぬ
ても申さんといふいつくよりといへは是

「

は大こくてんものにて候か御身はおやか
うくの人とうけ給はりめてたきことに
思ひわれらも御やとをかりて住はやと
おもひこれまでまかり候とそ申ける大悦
これを見てあらめてたや大こくの御入
なるそまつ大豆のはんまいらせよとて
かたのことくしつらひていたしければいつれ
もくうちくひぬそのち大こくはぶく
るよりかくれみのかくれかさうち手のこ
つちによいほうしゆなといふいろくのた
からをとり出し大えつにとらせ給ふ
(第三回)
とかくするほどにやうくその日も暮かた
なりその夜はせつふんとてまめをた
はらよりとり出しいとなみけるに又かをと
あらけなくたくくものありたそとこた
へければ大こくの給ふにあひかまへて此
戸あくるなこよひはせつかはりにておに
の行くる夜そ今たたくはやうありけにお
ほゆるそとさやくき給へばけにもと思ひす
きまよりのそきてみればまことにおそ
ろしきおにのいかめしきすかたにてこくを

「

あけよ〜といふほどにそこらの人こそり
よりわなゝきおそれけるに大こくはこれ
を見てゆめ〜おそるへからすわかすへき
やうをゝしへ申さんとてまめといふものを
よくいりてこれにておにはそとふくは
うちといふてまき給へとの給ふに大悦
のすけおそろしなからをしへのごくすれ
はおにはめをふさきあらかしこき人間
のわさかなとつふやき〜ゆくゑも

しらすかへりけり

かくてそのよもあけかたになれば又かとお
おとつれもの申さんといふ大えつはれい
のおによとおもひをともせず大こく大
えつの助をちかつけの給ふはいまのかとを
たゝく人はかたしけなくもいさなきのみ
こといさなみこの御子にひるこのみ
ことゝいふて伊勢天せう大しんの御おと
うとにてわたらせ給ふえひす三らうとの
にてにしの宮にあとをたれうみをれうし
給ふみことにてましますそはやくしや
うしたてまつり給へとの給ふほどにさて
はわかえひすの御さんなれとて多ほし

かりきぬちやくし御むかひにいてこなたへ
としやうしけるえひす三らう殿大きによろ
こひさきに立ていり給へは⁴いきやうゑるい
のものよろつのかひのからを具そくのや
うにしてひやう具をもち御ともして大悦
の家に入給ふ

(第四回)

さて大こくえひす三らうしたいありをの〜
さしやうし給ふをみれば大こくてんもせい
ひきくふとり給ふえひす三らう殿もせい
ひきくこえ給ふ又大えつの助も大き
にこえたるおとこの三人ならひ給ふありさ
まいつれもふく〜しうそみえにけりさる
ほとにしゆんのさかつきをとまはし三々
九度にもなれば大こくさかつきをひかへ
させ給ひまことやうけ給はればえひす
三らう殿はまいをさしまひ給ふとな一
かなてみはやとの給へはえひす三らうとのは大
きにわらひて御けんさんにまいるほとはなけ
れとも御のそみをそむけはおそれありさらは
をの〜はやしてたへいて〜まはんとて
たいをははたとうちあけて大えつとき

けはめてたの名やしそののすゑまですゑひ
ろかりをおつとりてまひおさめうよなうれ
しやな

君か世は千よにやちよに

さゝれいしの

いはほとなりて

こけのむす

まで

くくと

くりかへしく二三へん

かなて

給ふ

(第五回)

そのうち大こくのさかつきをえひすとのへさ
し給へはたふくとうけもちてかやうにめて
たきおりから大こくてんのまひをしよまう
申侍らんと給へは大こくてんつねにさへ
糸かほよき人のさけにはえひ給ひつゑ
つほにいりてわらひ給ひあらはつかしやつね
にけいこのせざるゆへかやうのところにてめいわ
くする事よたゝそれかしには御ゆるされも
あるへう候やとさい三しし申給へともかさ

ねくしよまうしてはやし立てすゝむれは

こらへかねて大こくてんはうちてのこつち

にすゑひろをおつとりそへておほくとたち

給ひなにをかの給ふとおもへはまつ大こく

かのうには一にたはらふまへて二ににつ

ことわらふて三にさけつくりて四つ世の

中よいやうに五ついつものことくに六つむ

やうそくさいに七つなに事ないやうに八

つやしきひろめて九つこくらをたてなら

へ十でとうとおさまる御代こそめてたけれと

まひおさめものさしきへなをり給ふ

さるほとにその後はらつふになりておも

ひさし思ひとりにし給ふほとにえひ給ふ

ことかきりなしかくて大こくの仰にはこと

さらけふは正月二日にて吉日なれば

はいかいあるへし大悦の助しゆひつし給へ

とてまつえひす三らう殿のほつ句に

つるうほもめてたい春のさかなかな

大えつのすけ

こゝろのまゝにかすみくむ袖

大こくてん

』(以上上巻)

いねつみてのとかにあそふ友ならん

とおもて第三までし給ひけりかくて大こく
うちわらひ給ひめてたき御事かなそのうへ
は何をかしてあそはんと給ふえひす三
郎のおほせには大こくてんはよくこへた
まへはさためてちからもつよからんかやうの
あそひのつゐてにすまひをいはんととりて
なくさみたくこそ候へとの給へは大こく心よ
けにうちゑみておほせのことくかくめて
たきおりふしなれはたれをかはちんいさゝ
らはすまひ一はんとり申さんとてしや
うゑをふわとぬきすてたつなをつよ
くおさめゆるきいてさせ給へはえひす
三らう殿もおなしくいて給ふ

大えつは行事にて

たかひにいりくみ

手をくたき

とり給ふ

(第六図)

かやうにふくの神あつまりあそひたはふれ
て大えつのすけかふつきになる事を
よろこびまもらせ給ふゆへに何かはもつて

あしからんしたいに家とみさかへけんそくあま

ためしつかひ四方にくらをあまたうたせ出入

ひとかすしらすふつき榮華の身となりふ

たりのおやをかしつきいよ／＼かう／＼をなし

けるにそのころたんはのくに大江山のほ

とりにおふてきりゑもんとてぬす人の大

しやうありかれか手にはきりえたりや

きりのすけきりすてのまくりのすけきつ

てやらうのすけなといふ一きたうせんぬ

す人かす十人ありけるか大えつかたから物

おほくしてさかへたるよしをつたへきゝかれら

ひとつところにあつまりひやうちやうするは

此ほとあまたのぬすみをしとりきりとり

をするといへともいかめしきことはなしうけ給は

れはよし野の里大えつのすけとて長者

ありてたからはくらにみちみてりときくいさ

やをしよせてたからをうはひとらんとてふ

れしやうまはしはいくわいしてしせつをう

つさす大えつのすけかもんくわいさしてせ

めよせ時をとつとそつくりける大えつは思

ひもうけさることなれはいかゝかせんとふため

きけるされともこゝに大えつからうとう

に宇津の太郎となつてよろひはちま

きなけかけ太刀おつとりまつさきかけて

きつていて大おんしやうにて申けるはなに

ものなれはかくめてたき御代にいくほとのいの

ちをなからへんとてらうせきはするやらん我

くかめのまへにてらうせきはせさすましそ

こを引なといふまゝにしころをかたむけお

もてもふらすきつてまはれは大えつから

うとうともこれにちからをへてわれくくと

すゝみける大くくてんはこれを御らんして

我しひふかき身なれはころすはまことに

ふひんなれとも是ほとのあく人をたすけを

きなはともひかるゝ人いく千万もあるへしい

てくうちころしてあまたの人をすくはんと

うちてのこつちをおつとりてゆるきいて

給ひてぬす人の大しやうとおほしきものを只

一うちつゝにみけんをうちくたき給へはえひ

す三らうとのほうほつりさほをおつとりて

かひくしき大くくてんの御はたらきやいて

くわれもあく人をしめしせん人になさはや

とうほつりさほを一ふりふりたまふとみれば

ぬす人とものかふとのてへんしころのはつれ

こてわいたてのうてくひをとかひひさ口

みゝはなくちにうほつりはりを引かけく

引よせ給へはけんそくたちはおりあふてひ

とりくからめとり給ふありさまは大かいのう

をの一もうはりにあきとをつらぬかれ

尾ひれをうこかせとも

かなはずしてつるに

をかに引あけら

ることく

なり

(第七回)

そもく大く天神はたいしやく三十二将の

そのひとつふつほうしゆこの天人也てん

ちくにてはまかゝら天と申す今日ほんにて

は大く天神と申なりいろくろくせいひき

くおもてにあいきやうましく心にしひふ

かくして大きにこへふとり給ひ身おもけ

に大なるふくろをかたにかけてましませは

かりそめのいくきなにもなんのようにも

立給ふましきとこそみえ給ふに三めん八ひの

大くとなりては身にかつちうをよろひぬ

すみのうへにこれをくらすたためてかけいて

給ふ時にはたはらをしき大六天のまわ

ういく千万きそひかかるといへともなんな

く打かち給ふとかやかかくてぬす人ともはこと

く引しりそきぬ今は何のおもひもなく

ひめもす夜すからうたふつまふつし給ふにそ

のほと廿日あまりすきてある夜雨かせし

きりとをりていなつまのかけすさましく

しけれはいかなることにかとあやしむところ

に大もんを大せいしてをしやふりて数十人

うちいるをとしけりけいこのものともすはや

れいのぬす人ともか又夜うちに入たりと心

えててきはいづくにか有とみれともさらに

なしこは何ことぞと思ふところにんしやう

よりくまのてのことくなるけおひいてたる

ななき手をさしおろし大えつのすけか

もとりのをにきりてからひたるこゑにて

をのれかたからゆへにわれくはしゆらたう

へおちしなりにくしくといふて中に引

さけられなからこはいかにせんとかなしむとき

大こくはおとりかゝりうちてのこつちにて

はけものゝまつたゝ中をしたゝかにうちた

まへはちとよはりたるていにみえたるをむす

とくみ給ふえひす三らう殿もおりあひから

めとらむとし給へはいつくともなくうせにける

大えつのすけはこれにおそれておきもな

をらすふしむたりちゝはゝはかなしみてこのは

けものはさためてぬす人ものはひきめのを

てあるらんかやうのはけものはひきめのを

とにおそるゝなりとてまい夜はんしゆを

すへとのゑをして引めをいさせふうを書

もんくををしければめにもみえぬものき

たつてふうをとつてすてけるほとに

かくてはいかゝすへきと
おもひわつらひ

給ふ

(第八回)

大こくてんの給けるはそもく今けんする

ところのあくりやうともみなしゆらのけん

そくたりこれをしつめんばかりことをあん

するに大はんにやきやうよむにしくへからす

そのゆへはたいしやくとしゆらとしゆみのち

うわうにてかせんあるときたいしやくいくさ

にかつてはしゆら小身をけんしてくうしの

あなのうちにかくれしゆら又かつときはしゆ

みのいたゝきにさして手に日月をにぎり
あしに大かいをふむしかのみならず三十三天
のうへにせめのほりたいたしやくをおひおろ
しよくかいのしゆしやうをことくくわか有
になさんとするにしようせんしんせん
ほうたうにあつまつて大はんにやをかうし
給ふこの時こくうよりりんほうくたりけん
けきをふらししゆらのともからをつたゝに
さききるとみえたりされはしゆみの三十三天
をりやうし給ふたいしやくたにもわかゝなはぬ
ときにはほうみをもつてかうふくし給ふそ
かしいはんやはくちのほんふをやほうりき
をからすはたいちする事えかたしと申給へ
はこのきまことにしかるへしとてにはかにそ
うしゆをしやうしてしんとくの大はんにや
を日夜三部までそよみたりける此はんにや
のかうとくのちからによるてしゆらはるりき
をうしなひけるにやたうしかうさのうへにて
けいひやくのかねうちならし給ふときかのぬす
人ともはいつくともなくこつせんとして来り
本尊をふしおかむにしにはしうんたなひき
いきやうくんし花ふれは此ぬす人もちう

「

さいことくくめつししゆらのくけんをまぬ
かれたちまちこくらく世かいいいるかと
そみえにけるまことなるかなや天ちくの
はんそくわうは仁わうきやうのくとくに
よつて千人のわうをかいる事をやめわか
てうのぬす人は大はんにやかうとくのけ
ちえんによつて三とくをまぬかるゝ事を
えたりきまことにちんこ国家のきやう
わうりやく人民のようほうなりさても此
事きやうにかくれなかりしかはみかともきこ
しめされてめてたきことにおほしめしや
かて大えつかおやこともにめしのちよくし
たつかたしけなくもちゝは百三つ母は百
さい大えつは卅五才と申にははしめて
さんたいしたりしにみかとゑいらんましゝ
て大えつをはよし田のなにかしきよむね
とめされそれよりせうてんをゆるされあ
またのしよちを給はりけり

(第九回)

さてみふの中なこんの御むすめ十八に
なり給ふをふさいときたむへしとのせん
しにて吉日えらひむかひとりひよく

れんりのかたらひをなしわか君ひめきみ

五人まていてき給ひていよ／＼はんしやう

し給ひけり太らうの御子は中将になり二らう

にあたり給ふはせうしやうに成給ふ三らう殿は

し／＼と申すのこりはひめきみにてわたら

せ給ふけいのう世にすくれ中将とののはよ

こふえをふきせうしやうはことを引し／＼うは

ひはをよくたんし給ふほとにみかとのけん

さんにもいれたてまつりしかはうちの御おほ

えめてたふしてむねにむねをかさね門

にかとを立ならへ春ははなのもとにて日

を／＼くりなつはいけみつをあいし秋は月

をなかめち／＼は／＼はまこたちをさうに

をき給へは大えつふうふはもろともには

しちかくいて給ひ大こくてんもえひす

三らう殿もこなたへしやうし給へは大こくも

えひす三らうとのもうちわらひ給ひてよ

きかな／＼めてたし／＼とゑみをふくみさ

しやうし給へは大えつはほうらいきうを

まなひたるたいへいをさ／＼け給へはきた

のかたはへいし一具くちつ／＼ませふくの神

をもてなし給ふそのとき大こくおほきに

よろこひ給ひてさらはかやうにめてたき

をりふしわれもいさまひをまはんとてお

ほ／＼と立あかりひやうしをふんて。なるはた

きのみつ日はてるともよもたえしたへぬ

なかれのきくの水いのちは千とせをかさ

ぬへしあまつ下ねもおさまりてけにめて

たさそかきりなきえたをならさぬ御代

なり神と君とのみちすくにしやうらくに

君か代は御さなからあくまをはらひおさまる

手にはしゆふくをいたき千秋樂は民をな

て万歳らくにはいのちをのふあひおひの

松風さつ／＼のこゑそたのしむ／＼けにやあふ

きてもこともをろかやか／＼る世にすめる民

とてゆたかなる君のめくみは有かたやと

二三へんかなて給ふ

(第十圖)

その／＼ちはとしをかそへて月をまし日を

かさねてしそんはんしやうし給ふほとに

もんくわいに人みち／＼てこしくるまのたて

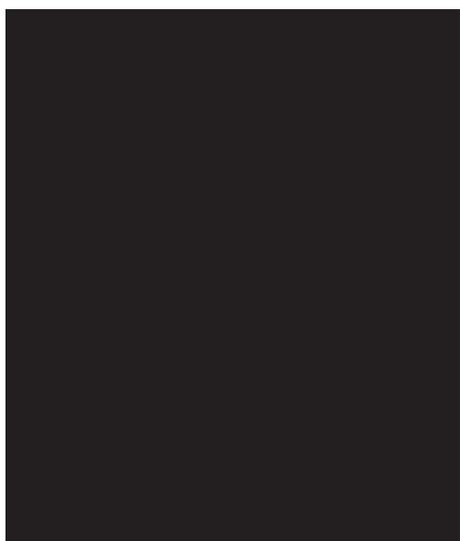
ともなしましてかたをならふへき人なくさ

かへ給ふそめてたき

『(以上下巻)』



第一図 本絵巻の中で唯一、料紙二枚を継いで大判にしている。中央左下に樵った木を担いできた大悦と、蓑笠を届けに来た父母が描かれる。田は描かれないが、第一図にこの場面を描くのは④国文学研究資料館蔵本、⑤英勝寺蔵本に同じ。③国会図書館蔵本は大舜の孝行譚を描く。



第三図 大黒天が来訪し、隠れ蓑笠、如意宝珠などの宝物を授ける場面。大黒天は本来黒い肌であるが、その通りに描くのは珍しい。④は大黒と大悦の位置が逆、⑤では袋から宝を取り出す様を大悦から見えないように隠す。③は次の場面とともに描く。



第二図 上臈に梨の実を参らせ、代わりに衣二疋をもらう。本文では「二」の字が落ちているが、挿絵には赤青二疋が描かれている。画面右に清水寺山門が、下に子安の塔が描かれる。④は山門の一部のみ、⑤では子安の塔のみ。③では藁しべを拾う場面で山門を描く。



第五図 恵比寿とその眷属の来訪。④⑤③は門前で出迎える大悦が描かれる。恵比寿の眷属たちの姿は異形異類の姿をとる④⑤③とやや異なり、人間に近く、時代が下る印象がある。⑤と同じ烏賊に似た旗指物が見える。



第四図 節分に鬼の襲来。豆をまく大悦。奥では饗応の準備に魚をさばく場面が描かれる。④では構図は異なるものの本絵巻と同様に描くが、⑤では饗応準備を主に描き、豆まきは描かれない。



第七図 大黒天と恵比寿の相撲。恵比寿の眷属の姿が第五図とは異なり、組み合う福神の姿と併せて東大本『隠れ里』に似る。福神による相撲は『梅津長者物語』『隠れ里』にも見える。④⑤は張り手、③は恵比寿の足を取る大黒天を描く。



第六図 酒宴での恵比寿の舞。末広がり魚釣り竿を持つのは本絵巻の特徴。④では構図はやや異なるが本絵巻に似る。③⑤は両福神の眷属も描かれる。大きく描かれることが多い福神の姿が、人間と同じ大きさで描かれるのも本絵巻の特徴。

(下巻)



第九図 盗賊が修羅となって再び襲来する場面。修羅が裸身の人型で描かれる点と、本文にある門に貼った修羅除けの札を描くのは本絵巻の特徴。④⑤は甲冑をまとう異形、③は天狗や天神の姿で描かれる。構図は④⑤と同じ。



第八図 盗賊に応戦する福神。大黒天は打出の小槌で、恵比寿は釣り竿で戦う。これも『梅津長者物語』にも見られる場面。⑤はほぼ構図を同じくするが、④③は門外にまで盗賊を追う両福神が描かれる。



第十一図 物語末の酒宴の場面。大悦の若君姫君が画面下に並ぶ。④は大悦の妻、若君三人、姫君二人に加えて郎党を、⑤はさらに福神の眷属も加えてより豪華に描かれる。③では大悦の両親と若君、郎党が描かれ、女性は描かれない。



第十図 天皇に拝して官位を授けられる場面。④と構図もほぼ一致。⑤は構図がやや異なるものの、おおむね一致する。③にはこの場面なし。大悦の妻の懐妊の場面が描かれる。